

説教 『イエスが主であるということ』 山本 護 牧師  
聖書 申命記 5:11／フィリピの信徒への手紙 2:10～11

「すべての舌が、[イエス・キリストは主である]と公に宣べて、父である神をたたえる(フィリピ 2:11)」。そのために「天上のもの、地上のもの、地下のものがすべて、イエスの御名にひざまずく(2:10)」。「イエス」という名は、それほどまでに尊い。天上の天使や星辰、地上の被造物や自然、地下の死者すべてが「イエスは主である」と宣べる。この「主」は、「主なる神」といった何が違うのだろうか。

「主なる神」は、全知全能、宇宙と生命を創造し、恵みと愛とに富み給う方。うーむ、そりゃそうだろうが、何かおかしいぞ。私たちが人生を賭けて信頼する方は、定款のようにあらかじめ定められているのか。私たちの神とは、イエスという人にありありと「生きておられる父」ではないのか。もっと言えば、イエスが「見ていた父」とも違う。私たちは、イエスという方において「キリスト(救い主)なる神」に出会う。その真実が、「イエス・キリストは主である(2:11)」という記述になった。

イエスに尋ねた金持ち青年は、律法を遵守し、隣人を自分のように愛していた(マタイ 19:16~20)。「だったらその愛を実行してごらん(19:21)」とイエスは応じた。すると青年は「隣人をさして愛していない事実」に気づかされる(19:22)。福音書を読む者は、自己を青年と重ねて見る。だがイエスの愛には建前と現実の段差がなく、それ以上だった。罪人、徴税人、貧窮者、障害者、病者らの許で楽しそうに過ごした。彼らを「自分よりも」愛し、その愛を実行するために世の秩序を、命懸けで踏み越えた。

私たちはこのようなイエスに、神が生きて働かれている様を、キリストである姿を見る。私はそれ以外、神の具体的な姿を知らない。預言者の声を聞く時も、聖霊の働きを予感する時も、キリスト抜きに現実だとは思えない。それゆえに「イエス・キリストは主である(フィリピ 2:11)」と告白される。

教会においてキリスト者は、心を合わせて共に祈り合う(使徒 1:14)。ところがイエスは、人々から離れて祈っていた(マタイ 14:23, ㊦ 22:41)。イエスの祈りは神との一致そのもの(㊦ 22:42~44)。その苦しみの祈りは、愛の行動として現れる。その結果としての十字架は、「全知全能」や「恵み、救い」といった立派で神々しいものとは違う。十字架で死んだイエスは、後にキリスト(救い主)だと認識される。イエスがキリストであり、すべての主であるということは地上の出来事として、かろうじて分かる。しかも、それだけに限らない。来るべき時の天上にとっても、やがて死すべき私たちの死にとっても、キリストは主に違いない(フィリピ 2:10)。キリストの救いは、生と死を超えて差し伸べられている。

それにしてもなぜ、信仰者は「金持ち青年」のようであるのか。立ち止まって自らを省みる必要があるだろう。「あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない(申命 5:11)」。なぜ大切な神の名を「みだりに」唱えたらいかんのか。大切であるがゆえに、軽々しく、気安く、神のことを分かったつもりになってはいけないのだ。そうした手軽な信仰は、神に従い続けることなく、金持ち青年のごとく自分の正当化に流れる。だから私たちは「神の前で、神と共に、神なしで生きる(D.ボンヘッファー)」。「イエス・キリストは主である」という告白は、無神論ぎりぎりの、深い信仰領域を示している。



#### 【おまけのひとつ】

信仰者の島は大陸棚に囲まれ 波打ち際から信仰がほどよく深まっていく 無神論者の島はしばらく遠浅の浜が続き いきなり海溝への断崖がある どちらの島からでも 深海の奥義まで行けるが